

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
『ともに学び 心がふれあう学校』 ○ 進んで学習し、気づき、考え、行動できる生徒の育成 ○ 自他を敬愛し、公共心をもった生徒の育成 ○ 心身ともに健康で、最後までやり抜く生徒の育成	① 「教える・育む・鍛える」を意識した「時・場・礼」の徹底による人格形成と心の教育 ② 確かな学力の定着と授業規律の確立 ③ 学級づくり、学年づくりから学校づくりへ（認め合い、高め合う生徒の育成） ④ 進路指導・キャリア教育の研究の推進 ⑤ 特別支援教育の充実

達成度 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分である
 D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

①『学び合い』の手法を用い、着実な学力の定着を図り、生徒の目指す進路を達成させる。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
運営 学 校	○教職員の資質の向上	・教職員の資質・能力の向上	・「鏡ラーニングルール」を基に、授業形態づくりを重視しながら、授業における学びの手法の研究を通して、全員が分かる授業に向けて授業改善を行う。 ・教育センター講座や研究発表会への積極的な参加を勧め、伝達講習や資料提供を行い、校内研究の内容を充実させる。 ・校内研究等を通して、全教員が授業の工夫・改善を行う。	・市学向上指定校の取組をさらに深く、生徒主体の授業づくりにもとづく指導案の検討や授業実践を行い、授業公開を行う。 ・教育センター講座や研究発表会への積極的な参加を勧め、伝達講習や資料提供を行い、校内研究の内容を充実させる。 ・研究組織を見直し、学向上と生徒指導の2部会を組織することで、研究の質を向上させ、教職員の資質の向上を目指す。	B	・生徒自身が、教えてもらうのではなく、自分たちで正しい答えにたどり着こうとする姿勢で授業に臨むようになり、自分の説明(考え)を聞いてもらう。他の生徒の説明(考え)を聞き、どう考えを深めていくためルーティンが確立されつつある。 ・生徒の学びへ向かう態度(学習意欲、他者との協働に対する意識)の改善や、学習成績(知識技能、活用力)の変化をみとめるデータの収集が、現段階では不十分。 ・各研究部会での連携を密にし、それぞれのデータを持ち寄った総合的な考察が必要である。	・一人複数回、同一教科複数回の授業研究会を行い、実践や改善を認め合う機会を多く持つ。 ・指導案を準備したり、特別な時間設定をしたりする。いわゆる「研究授業」ではなく、模擬授業や指導案検討会を定期的に行い、皆で考える機会を増やす。 ・各教科や特別活動等の各領域ごとに、最低1回の研修を原則とする。 ・各研究部会の活動時間確保のために、月一回の校内研究会の内容の見直し、授業の空き時間を調整して各部会を授業時間内に設定する等の工夫を行う。
活 教 育	●学力向上	・個に応じた指導、分かる授業に向けた指導方法の改善	・『学び合い』の手法に基づいた「鏡ラーニング」を推進し、学び合う活動を多く仕組んでいく。 ・学力・学習状況調査等の分析に基づき、基礎的な内容を確認しながら、その知識を活用した課題づくりを行う。 ・全国(県)学習状況調査における各教科の通過率で県平均を上回る教科を前年度より増やす。	・ともに学び合う学習や調べ学習を通して、基礎的な知識の習得をねらい、考察及び表現活動を取り入れることにより、その知識などを活用する能力を高めさせる。 ・生徒の意識調査や分析ツールの活用を促進し、教科等で課題づくりに取り組み、生徒の学びを深めていく。 ・生徒の学ぶ意欲と姿勢を向上させるために、家庭と連携した「主体的、対話的に学ぶ習慣づくり」に努める。	A	・年間を通し、各教科で学び合いの活動を取り入れた授業が行われ、生徒が主体的に学習課題に対して取り組み様子が見られた。また学び合いの活動を取り入れた研究授業を行い、課題の設定から、指示の仕方、生徒に提示する資料などを検討し、より生徒が主体的に活動できる授業の在り方について考えた。 ・学習状況調査では、1年生において、知識・理解に関する問題の正答率が高く、各教科における確認テストや問題演習の成果が見られた。2年生において、国語の正答率に高まりがみられた。特に、「話す・聞く」に関する問題の正答率が、県平均に近づいている。	・今後も「学び合い」の手法を用いた授業の在り方について、職員間で検討し、指導法の改善に努めたい。 ・各教科において、資料の読み取りや、説明・表現する力を高めるための取り組みとして、問題形式の演習も取り入れ、文章の作り方に関する指導の時間を確保していきたい。 ・各教科で、宿題に限らず、小テストや課題を設定し、家庭学習の必要性を子どもに示すとともに、学級通信を通して、家庭にも家庭学習を充実するための協力をお願いしていきたい。
学 校 運 営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・校務等の効率化の促進	・学校運営を組織的にし、全職員が校内LANやSEI-Net等を有効活用しながら業務の効率化を図るとともに、業務内容の分散化を行い、校務処理を効率化する。	・企画委員会を中心として、行事や企画を精選するとともに、学年や教科などが組織的に活動しやすい環境をつくる。 ・資料のやり取りや職員間の連絡、統計や文書作成などを効率的に行う。 ・グループカレンダーなど限られたソフトで、学校行事や報が確認できるようにするのを検証する。	B	・行事の見直し、精選を行った。 ・職員間、学年間の連絡調整を密に行い、職員が円滑に活動できるような計画立案・準備をすることができた。 ・限られた環境でのペーパーレス化、業務の効率化を行うことができた。	・職員間の連絡、調整が円滑に行われていない場面があり、さらに連絡を密に取る必要がある。 ・グループカレンダーでの学校行事や出張の管理については、試用段階であり、利用者を増やして利便性をあげていきたい。

②人権教育を充実させ、特別支援教育に対する意識も高める。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
活 教 育	●いじめの問題への対応	・いじめ問題の未然防止	・「いじめ対策委員会」を定期的に開催することでいじめ問題を未然に防止し、いじめ問題発生件数0件を目指す。 ・日頃の生徒の様子を観察し、全教職員で共有する場をつくり、生徒の姿を見取れるようにする。 ・Q-Uテストを実施し、よりよい学級集団づくりに活用する。	・無記名方式による生活アンケートを定期的に実施し、生徒指導部会の中で情報を共有し、その結果を対策委員会と協議することにより、いじめの早期発見・初期対応に努める。 ・個人日記や日頃の生徒の観察などを全職員が意識することで、生徒の姿をできるだけ敏感に見取ることができるようになる。 ・Q-Uテストを実施し、その結果について検討会を開催するなど、効果的な活用を図ることで、好ましい学級集団を形成させる。	B	・無記名方式による生活アンケートや日頃の生徒観察により、いじめの早期発見、初期対応が必要であるが、早期発見できたとしても、その後の各教員の対応により、保護者の理解や協力が得られないこともあり、学校の方針や方法をしっかりと示し、保護者とともに解決に向けて取り組む姿勢が必要であること、学校としてできること、できないことをはっきりと示し、保護者の協力を得ながら、解決へ向けていくことが今後必要であることを見直し、よりよい生徒指導体制を全職員でつくっていくことが大事である。 ・Q-Uテストについては、長期休業中に学年別に効果的な手立てや構造的なアンケートの例等の検討が行えたことは、有意義であった。	・日常的な生徒観察をこまめにし、保護者との連絡を密に取る中で、いじめアンケートや生活アンケートを実施し、今後も早期発見、初期対応に努めていきたい。また、保護者との連携についても、問題が特になくても、日ごろの観察を通して心配な生徒への保護者との連携を図っていくことが必要である。 ・Q-Uテストについては、長期休業中に結果の検討を行ったが、1学期及び2学期の2回は実施し、実情を見ることも必要となってくる。今後、予算の面や実施回数について、検討していきたい。
活 教 育	●心の教育	・自他を尊重する姿勢の育成 ・教職員の意識の向上	・生徒の9割以上が授業中も含め、時と場合に応じた態度や言葉遣い、相手思いの言葉遣いが出来るようになる。 ・特別支援教育に関する研修を推進することにより、インクルーシブ教育に対する意識が高まるようになる。	・アクティブ・ラーニングにより学習者同士のかわりを重視し、個と個をつなぐ開発的生徒指導の視点での授業づくりを展開する。 ・自他のよい面を認め、学級や教科等で相手のことを考えた言葉を使うよう指導する。 ・特別支援教育コーディネーターを中心にインクルーシブ教育についての研修会を開催することで教職員の意識を高める。	B	・学習者同士のかわりを重視し、学習者同士が関わる場面を多く設定した授業づくりを行った。 ・学級、教科、学校生活のいろんな場面で、相手の事を考えた言葉を使うよう指導した。 ・特別支援教育に関する研修会を2回開催した。	・アクティブ・ラーニングや学び合いの良い面はあるが、場合によっては授業の形態を工夫する必要がある。学習規律をより重視していく必要がある。 ・自他のよい面を認め、学級や教科等で相手のことを考えた言葉を使うよう指導する。 ・特別支援教育に関する研修会は、年に2回は継続して行ってほしい。
活 教 育	●志を高める教育	・生徒一人一人が自分の夢や目標をもち、自己実現できるように努力しようとする気持ちを育む教育活動の推進	・「郷土を知ろう」の授業の振り返りを実施し、「わかった」と評価する生徒80% ・自己の夢や目標をたてる機会を設け、自己実現に対する手立てや方法について学ぶ機会を設定する。	・かがみん話Vol.1, Vol.2(鏡の歴史研究会編)等の郷土資料を使い、「郷土を知ろう」の授業を行う。 ・特別活動において、高校調べや職業調べ、PASCARDの実施を行い、自分の適性について知ること、将来の夢や目標を考える機会とし、自己実現へ向けての手立てを考える授業を行う。	B	・かがみん話の郷土資料を使い、「郷土を知ろう」の授業を行った。授業で行った学習も含め、文化発表会のステージ発表に向けて、実行委員を中心にパワーポイントを活用し郷土について調べ、発表することが出来た。また、個人では、鏡新聞を作成したことで、知らなかった郷土(鏡)のことにも目を向ける生徒が増えた。 ・特別活動において、高校調べや職業調べ、PASCARDの実施を行い、自分の適性について知ること、将来の夢や目標を考える機会とし、自己実現へ向けての手立てを考える授業を行った。 ・その結果、授業中の態度や宿題等の定着率も以前と比べて、上昇した。また、休み時間にも友達と興味のある高校について話をするなど、自分の進路における意識の高まりを感じた。	・左記のかがみん話の郷土資料を使い、「郷土を知ろう」の授業や、特別活動においては、高校調べや職業調べ、PASCARDの実施を行い、自分の適性について知ること、将来の夢や目標を考える機会とし、自己実現へ向けての手立てを考える授業はこれからは継続していきたい。 ・多くの先生方が保護者の研修にできるだけ積極的に参加し、自己啓発に努める時間を持ちたい。 ・また、生徒の学びや成長、生徒自身が道徳的価値の理解をどのように深めたかを記述するワークシートや評価の在り方の研修、教材研究をさらに努める必要がある。
活 教 育	○キャリア教育	・職場体験の計画と指導の充実	・職場体験が自覚に目覚め、自己肯定感や存在感を高める場となるようにする。	・職場体験や地域の方々の協力を得ながらマナー検定を実施するなど、社会における必要不可欠なスキルやマナーを身に付ける。 ・地域教育力を効果的に活用し、職場体験で開発的生徒指導の場を仕組み、生徒の自己肯定感(自尊感情)を高める。	A	・事前の職業調べや自主的な体験計画づくり、また履歴書の作成や事業所での対応シミュレーションを通して、自身の社会性や適性を確認し、またその向上に努めることができた。 ・事業所においては、快諾のもと、熱心に指導いただき、生徒は社会人としての基本的な内容を身に付けることができた。	・身近な職業人(保護者等)による講話等の実施の可能性を探る。 ・体験を通して学んだことが、今後の学習や生活により生かせるように、関心意欲がさらに高まる事業所を開拓拡充する。
活 教 育	○生徒会活動	・ボランティア活動など生徒の自主的な活動の充実	・県内でも最も古いJRC加盟校として、生徒会を加えて行うボランティア活動など、開発的生徒指導の視点で生徒の自主的な活動を仕組み、活躍する場を設定する。	・ボランティア活動について「気づき・考え・実行」ができるよう助成・支援を行う。 ・校内のみならず、登校道路の清掃や松葉かきなど地域に根ざしたボランティア活動を展開する。 ・各専門部の特性を生かし、生徒会本部と協力し、ボランティア活動を行う。 ・活動後は生徒会よりなどで生徒、保護者に啓発を行う。	B	・昨年度と同様に、松葉かきの参加は自主参加であるが、多くの生徒が参加した。また、地域のボランティア活動の案内が多くの生徒が参加した活動であった。 ・スマイルロード委員会を立ち上げ4年目になり、学校前の道路に花畑や草花、地域との連携して整備することができた。	・スマイルロードについては、来年度から植樹がされている関係で、規模を縮小しないといけないことになるが、生徒会ボランティア委員からの呼びかけでまた新しい取組を生徒とともに考えていきたい。また、アルム年回収や書き損じがきの回収にも、目標を設定したり回収BOXを製作するなどして意識を高めていくことによって、積極的に取り組む生徒を増やすことができた。今後も生徒会を中心に、ボランティア活動に積極的に取り組ませたい。

③情報発信、地域との連携に努め、開かれた学校づくりを推進する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学 校 運 営	○開かれた学校づくり	・学校からの積極的な情報提供	・公開授業等、学校行事への保護者及び地域住民の参加率を前年度より高める。 ・HP及びびはなま連絡帳を更新並びに学校だよりを発行する。	・「毎日」が授業公開日を継続し、授業・行事等への保護者・地域の参加の促進を行う。 ・HP及びびはなま連絡帳を更新する担当者を各学年に増やし、機会あることに更新することに心がける。	B	・HP更新頻度を増やし、学校からの発信機会を増やした。 ・HP更新を複数人の担当者で行うことができた。	・授業や行事等への保護者、地域の方の参加の機会をもっと増やす。 ・HP更新を各学年や各教科等で可能となるように、研修の機会を持つ。
学 校 運 営	○小中連携	・小中連携を一層深め、指導の充実 ・地域との連携の強化	・小中9年間を通して共通した取組みを行い、生活ルールや学習規律を身に付けさせ、小中のギャップをなくしていく。 ・地域の人材を活用し、生徒の健全育成を行う。	・小中連携推進委員会を行い、方針を立て、実践へつなぐ。 ・授業参観・情報交換会を実施し、共通理解を深めていく。 ・各種活動において地域の人材を活用し、地域と学校の協力関係を築く。	B	・小中連携推進委員会において、来年度へむけて組織の改編を行い、各ごとの課題の洗い出しと来年度の年間計画の立案を行った。 ・中学校からの出前授業を実施、情報交換を行った。	・小中連携強化をはかるための組織の改編および、計画的な連携をおこなうための計画立案をすることができたので、実施に向けて今まで以上に連絡を密に取り取り組んでいく。 ・時間が限られるが、校種間の授業参観を行い情報交換や生徒理解を進めていく
活 教 育	○生徒指導	・開発的生徒指導の実践	・全職員が開発的生徒指導の理念に基づき、生徒が活躍できる場をより多く設定する。 ・職員の間で共通理解を図る。 ・全校生徒一斉の生活指導を実施する。	・年度当初の会議での提案を十分に理解し、実践する。 ・毎週、実施している生徒指導部会で、各学年の現状を共有することで、出てきた課題については、全体の問題として手立てを考える。 ・家庭での生活習慣は保護者や友人会活動の協力を得て、好ましい生活習慣及び生活態度の確立を目指す。	B	・各種行事において実行委員会の設置等による生徒主体の企画・運営を推進した。 ・生徒主体の学年集いを学年の実態に応じた段階的に実践した。 ・部活動キャプテン会を毎月行い、部活動の自主運営の補佐、指導及びリーダー育成に努めた。 ・毎学期、学年代表生徒による振り返り発表を行い、生徒の良さや強みを紹介した。他にも生徒の出番と役割、承認の場を可能な限り仕組みた。	・中学校三年間を見通した開発的生徒指導の実践を図り、各学年による取り組みの温度差の改善に努める。 ・部活動キャプテン会については、来年度も継続して行い、生徒の自主的な運営によって、部活動が実施されるようにする。 ・毎学期の生徒の振り返りについても、引き続き行い、生徒の出番を意図的に設けることにより、承認する場面を増やし、生徒の自己肯定感を高めていきたい。
活 教 育	●健康・体づくり	・性教育、命の教育の推進 ・食育の推進 ・基礎体力の向上	・性教育、命の教育を実施して自尊感情を高める。 ・食育の大切さの意識付けを行う。 ・運動に楽しんで取り組もうとする意識を高める。	・生(性)教育についての講演会を行う。 ・食生活アンケートや食育の授業を実施する。 ・授業や委員会活動の中で運動に対する認識を高め、スポーツに親しむ環境を整える。	B	・命の教育(性を含む)については、関係機関の協力を得ながら、学年ごとに講演会を実施することができた。 ・ほとんどの生徒が朝食を摂取しており、給食の残量も少ない。	・性や命についての指導は、道徳・学芸やたの教科との関連性があるので、ともに取り組んでいく必要がある。 ・毎日の給食指導で、正しい服装や手洗いの徹底をさせ、衛生観念をさらに高めるとともに、命の大切さを意識づける。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策

4 本年度のまとめ・次年度の取組